

氏 名	やまもと ゆかり
学位(専攻分野)	博 士 (工 学)
学 位 記 番 号	工 博 第 2911 号
学位授与の日付	平 成 20 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研 究 科 ・ 専 攻	工 学 研 究 科 建 築 学 専 攻
学 位 論 文 題 目	阪神間の近代郊外住宅地に関する研究 ——阿部元太郎の開発事例を中心に——

論文調査委員	(主 査) 教 授 高 橋 康 夫	教 授 高 田 光 雄	准教授 山 岸 常 人
--------	----------------------	-------------	-------------

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、日本近代郊外住宅形成史において重要な位置を占める阪神間の近代郊外住宅地開発について、これまで利用されることの少なかった旧土地台帳と旧土地台帳付属地図を活用しつつ、従来ほとんど知られていなかった阿部元太郎による開発事例——旧住吉村、旧芦屋村の郊外住宅地開発——を中心に実証的に解明することを目的としたものであり、序章、結章、本論全5章から構成される。

序章では、阪神間における近代郊外住宅地形成過程を概観し、次いで先行研究の成果と課題をまとめている。阪神間の近代郊外住宅地形成の特徴を考察するうえで、阿部元太郎による開発および近代郊外住宅地形成と田園都市思想の関わりに着目する意義を明確にし、そのうえで、本論文の構成を説明している。

第1章では、日本初の郊外住宅地とされる「池田新市街」の計画以前における郊外住宅地開発の動きについて考察している。まず、郊外住宅地誕生の前夜にあった明治半ばの都市・郊外の状況を把握し、鉄道の乗降者数と職業別戸数の変化から、住吉村では、別荘地ではなく生活の本拠地として郊外住宅が営まれていたこと、すなわち阪神間においては、「池田新市街」計画以前に郊外住宅地が形成されていたを実証した。次に、「池田新市街」計画以降に発刊された小冊子の内容から、近代日本の郊外住宅地開発が田園都市思想の影響を受けていることを示した。他方、長谷川如是閑「都市と田園」の記述から、阪神間では「田園都市」という言葉があらわれる以前に郊外生活が営まれていたこと、田園都市思想の影響がなく、独自に展開した郊外住宅地形成の流れがあることを明らかにした。

第2章では、近代郊外住宅地の誕生について考察している。まず、明治43年に開発された「池田新市街」について創設時の売却状況や住宅タイプの配列を把握し、計画的で均質的な空間であったことを示した。次に、阿部元太郎による住吉村の開発について旧土地台帳を用いて検討し、阿部の開発は明治42年に住吉村反高林で、翌明治43年には住吉村観音林で行われたことを明らかにした。また、住吉村反高林では、阿部元太郎と同姓で同じ出身地（滋賀県能登川）の豪商たちが、阿部の開発以前から土地を取得する動きをみせていたことも明らかにした。

阿部元太郎による宅地開発以前の郊外住宅地形成への動きについて、住吉村の人口・戸数・職業別戸数の変動をみることにより、郊外生活が営まれていたことを確認した。そして、旧土地台帳と旧土地台帳付属地図をみることにより、明治33年から大阪の実業家たちによる土地取得の動き、つまり郊外住宅地形成の萌芽がみられたこと、そして住吉村への移住者の住宅所在地を明らかにしつつ、住宅分布の変遷について考察した結果、移住者の住宅が集落周辺部の田畑や山林、荒地地に建てられたことを実証した。

第4章では、松風山荘住宅地における郊外住宅地形成過程について考察している。まず、佐多愛彦博士が購入した土地で開発が展開したことに着目し、旧土地台帳と旧土地台帳付属地図を用いて、佐多博士が購入した土地が旧芦屋村の杖泉・山坂・津谷にあること、購入時期は明治39年、明治44年、大正3年から大正8年の3期にわたっていることを明らかにした。ついで松風山荘住宅地の販売記録から、それらが昭和3年から昭和9年にかけて分譲されたことを確認した。阿部元太郎が

開発した土地は、昭和3年から昭和9年に宅地開墾されたもの、売買されたものであることを確認し、阿部による開発は旧芦屋村津谷で行われたことを示した。そして旧土地台帳と旧土地台帳付属地図を用いて宅地開発の範囲を明らかにした。

第5章では、住吉村と「池田新市街」のコミュニティ施設について考察し、コミュニティ施設の位置、コミュニティ施設の整備に関わった人物の居住地域を示した。住吉村のコミュニティ施設は村全域に分布し、コミュニティ施設の整備に関わった人物の居住地域も村全体に広がっていくことを明らかにした。一方、「池田新市街」のコミュニティ施設は、住宅地の中心部に集中し、コミュニティ施設の整備に関わった人物の居住地域は住宅地全体に広がっていくことが判明した。また、コミュニティ施設の整備、利用状況を検証した結果、住吉村・「池田新市街」とともに移住者がコミュニティ施設の整備に関わるが、コミュニティ施設の利用については、住吉村においては元来の住人と移住者がともに利用しているのに対して、「池田新市街」においては移住者のみ利用している状況が明らかになった。

結章では、一章から五章で得られた知見について要約している。

論文審査の結果の要旨

本論文は、近代郊外住宅形成史において重要な位置を占める阪神間の近代郊外住宅地開発について、これまで利用されることの少なかった史料、旧土地台帳と旧土地台帳付属地図（「公図」）を活用しつつ、従来ほとんど知られていなかった阿部元太郎による開発事例——旧住吉村（神戸市東灘区住吉）、旧芦屋村の郊外住宅地開発——を中心に実証的に解明することを目的としたものであり、得られた主な成果は次のとおりである。

1. 明治末期、日本初の郊外住宅地「池田新市街」の開発以前に、住吉村では別荘地ではなく生活の本拠地として郊外住宅が営まれていたことを、住吉村の人口・戸数・職業別戸数の変動、さらに鉄道の乗降者数の変化から明らかにした。

2. 旧土地台帳と旧土地台帳付属地図を郊外住宅地形成の史料として活用することにより、住吉村では、阿部と同姓同郷の豪商たちが阿部の開発が行われる以前から土地を取得する動きをみせていたこと、明治33年（1900）に大阪の実業家たちによる郊外住宅地形成の動きが始まっていたこと、明治42年（1909）から阿部による開発が行われたことを明らかにした。

3. 近代日本の郊外住宅地開発は一般に田園都市思想の影響を受けて行われているが、阪神間では「田園都市」という言葉があらわれる以前に郊外生活が営まれていたこと、また田園都市思想の影響を受けず独自に展開した郊外住宅地形成の流れがあることを明らかにした。

4. 松風山荘住宅地は、佐多愛彦博士が購入、集積した土地で展開した点に着目し、旧土地台帳と旧土地台帳付属地図を活用して、佐多博士が旧芦屋村の杖泉・山坂・津谷の土地を購入した時期は明治39年に始まること、阿部元太郎が開発した土地は旧芦屋村津谷にあること、その分譲時期は昭和3年から昭和9年にかけてであることを明らかにした。

以上、本論文は、日本近代郊外住宅の形成過程とその特質を明らかにする上で大きな示唆を与え、また阪神間の近代郊外住宅地開発の萌芽期の状況について新たな知見を提供するものであり、学術上寄与するところが少なくない。よって、本論文は博士（工学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成20年2月22日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。